

春の特別展

川の生活誌—そのめぐみと恐れ—

4月24日→6月2日

幽霊がよく出るところは、墓、恨みを残して人が亡くなった場所、そして川端。墓はわかるとして、なぜ川端に幽霊が出るのでしょうか？

川端に幽霊がでるのは、川が「あの世」への通路あるいは「あの世」それ自体と考えられたためです。洪水は容赦なく財産や命を奪いますし、また逆に上流からいろいろなものを流してきます。川で遊ぶ子供が溺れることもありました。こうした経験から川端の幽霊がうまれました。盆の精霊送りで川に灯籠を流すのも同じ考えからです。

「川端に幽霊が出る」とか、「川には河童がいる」という考えは、川とこまやかに接してこそ生まれた想いです。私たちはいま、川をほとんど意識することなく生活しています。川端の幽霊も河童もいなくなった代わりに、水は汚れ、魚もいなくなりました。現在の生活を反省し、祖先が川や水とどのように関わってきたか見たい、この展覧会はそんな考えから企画し、構成しています。

I 潤す—灌漑の歴史と習俗—

水田で稲作をしてきた日本では、灌漑用水の確保は一大事でした。そこで大小の用水が作られ、繰り返す水争いが起こりました。水がかりの悪い田にはさまざまな灌漑用具が使われ、いよいよ雨が降らなくなると雨乞いが行われました。水が流れてあたりまえの用水や田が、意外な歴史を秘めていることを江戸時代の絵図や彫刻、灌漑用具で紹介いたします。

II 運ぶ—河川交通—

人の背や馬と舟ではどちらがたくさんの荷物を運べるか、答えはいまでもなく舟です。県内の川も昭和初期まで重要な交通路でした。三国の町が古くから発達したのも九頭竜川の河口に位置したからです。舟をどのように通したか、木材の輸送はどのように行ったかなどを見ます。

III 育む—川の漁—

昭和の初めごろ、山深い大野市の下打波では福井平野の農村よりはるかにたくさんの魚を食べていた、

と言ったら驚きますか？ それができしたのはたくさんのお魚やアユが捕れたからです。川にはたくさんの魚がいました。そしてそれを捕る方法もいろいろなものがあります。

IV 壊す・浸す—水害と治水・水防—

川がいつも優しさだけを見せていたわけではありません。平野では少しの増水で田や家が水につかりました。そこで、むらの周囲を堤防で囲んだりする生活防衛の工夫が生まれました。また、明治後半になって初めて九頭竜川に大きな堤防が作られ、現在の安定した生活ができるようになりました。

V 遮る・流す—川のイメージ—

川や橋は歌になったり、さまざまな儀礼が行われたりしています。川との付き合いから生まれた観念（ひとの通行を遮り、川の向こうは別の世界とする考え）や川があの世への通であることを、絵画や儀礼の作り物で示します。

関連行事

- 講演会 5/18(土) 午後2時から

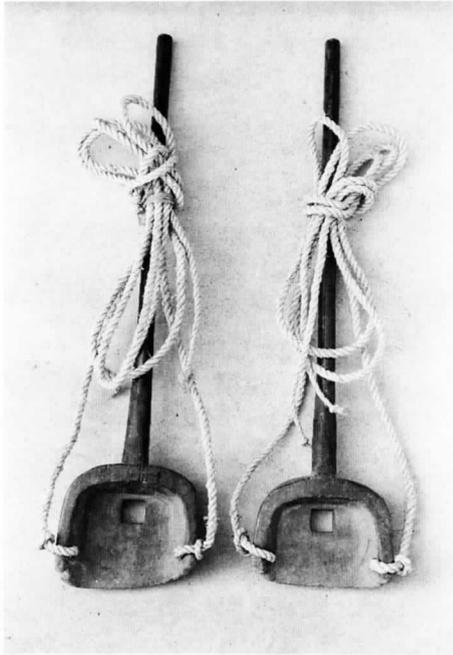
橋の日本文化論

『橋と日本人』の著者で、建築家の上田篤氏にお話しいたします。橋にはいろいろな伝説が伴い、文学や映画でも重要な役目をはたしています。橋にもいろいろな作りのものがあります。橋の構造やデザイン、そして橋の伝説などをとおして日本の文化を考えます。

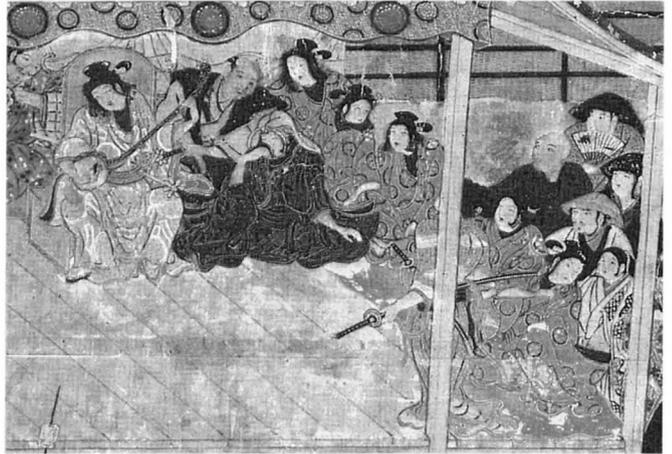
- 民俗教室 「川のくらしと伝説」
5/11(土) 武生盆地の水争い
5/未定 芝原上水
6/1(土) 川端に幽霊がでるわけ

- 映画会 5/19(日)
昭和20年代の竹田川改修の記録、輪中の記録
ほか川の漁の映画を上映します。

<展示資料から>



カブリ 滋賀県蒲生町



四条河原遊楽図屏風(部分) 愛知県天桂院蔵 愛知県指定文化財



縦型笠 池田町

秋の特別展

慈悲の造型 —越前の観音— 10月25日→12月1日

わが国の信仰の歴史の中で、もっとも広く崇敬を集めてきたものは観音菩薩です。それらは、朝廷、貴族の當んだ大寺院から、村むらの小堂までさまざまな形態でまつられてきており、上下を問わず身近なものであったといえます。また、その内容も浄土信仰によるもの、神仏習合によるもの、あるいは密教によるもの、さらには民間信仰にもとづくものと非常に豊富です。したがって、その造型には多様な様相がみられ、それは越前においても同様です。

今回の特別展では、越前にのこるそれらの観音菩

薩のさまざまな遺品を展示し、当地における観音信仰の歴史と広がり、そして多彩な造型を生み出した先人の祈りを確認したいと思います。

- ◆展示資料 仏像、仏画、懸仏、絵馬など約40点
- ◆展示構成

・浄土信仰の観音	・さまざまな観音
・密教の観音	・民間信仰の観音
・神仏習合の観音	・その他

研究ノート

古代越前の山中寺院

1. はじめに

越前地方で仏教寺院が建てられ始めたのは、7世紀第3四半期ころのことで、武生市深草廃寺を始点に、同野々宮廃寺、大虫廃寺、福井市篠尾廃寺、丸岡町坪江廃寺など多くの寺院が8世紀前葉ころまでに姿を現した⁽¹⁾。これらの寺院は、旧郡域に1~2か所程度が分布するところから、造営を主導した階層は、各地域の有力氏族であると考えられる。

7世紀後半代、とくに天武・持統朝前後は、全国的に見ても地方寺院建立の集中期で、これは、律令国家体制の確立をめざす朝廷が押し進めた造寺奨励政策の地方における顕現であった。その目的は、持統8年(694)の「以金光明経一百部、送置諸国。必取毎年、正月上弦読之。」(日本書紀)などの記事に見られるように、鎮護国家を念頭においた“地方の仏教教化”が第一に挙げられよう⁽²⁾。

如上の古代寺院の景観は、瓦葺の礎石建物が一定パターンの配置で展開する、いわゆる七堂伽藍がまず想定される。しかしその一方で、これとは異なる景観、すなわち瓦を葺かない掘立柱建物により構成される寺院の存在も以前から指摘されている⁽³⁾。越前でも、近年ようやくこのような寺院の形跡がかい間見られるようになってきている。小稿では、具体的事例として、山中に立地する仏教関連遺跡をとりあげ、時期や性格について若干の予察を試みたい。

2. 山中に立地する寺院関連遺跡の事例

(1) マンダラ寺遺跡

遺跡は、南条郡河野村河野に所在し、武生市と接する矢良巢岳(標高472m)の中腹、海拔約340mの東向きの尾根上に、約2,000㎡の平坦地が造成されている。ここを地元では“オマンガラ”と伝承し、また河野金相寺の「当寺略由来」には、室町後期、河野城主の若林長門守を大壇越とする「曼多羅寺」の名を残す。昭和63・平成元年度に県立博物館の指導により河野村教育委員会が実施した確認調査で、平坦面の最も山寄りに、ほぼ正方位に南面または東面する掘立柱建物跡2棟以上が検出された⁽⁴⁾。遺物の大半

は8~10世紀の須恵器・土師器で、器種組成は、一般集落の状況と大差ない。ただ、須恵器に浄瓶や鉄鉢形土器、小瓶など、仏教的性格をうかがわせる特殊な器種を含む点に注意される。

この遺跡の特徴は、①急峻な山中に立地し、通常の遺跡立地とかけ離れている。②仏器模倣形の土器が目立つ。③平坦地の山寄りに、正方位を意識しつつ、小規模な掘立柱建物を最低2回以上立て替えている。などの点があげられる。これらの所見は“オマンガラ”という密教的な地名伝承とも符合し、とくに③は前庭部を意識した寺院の伽藍形態とも考えられ、当遺跡が、山中立地の仏教寺院である可能性が高い。ただし、「当寺略由来」にいう「曼多羅寺」とは遺物年代が一致せず、中世の寺院がこれとは別に存在していたらしい。

(2) 上開谷遺跡

遺跡は、丹生郡宮崎村開谷に所在する。開谷集落北側の丘陵の海拔約180m(平地との比高差約120m)の南向き尾根状に立地し、ほぼ平坦に近い緩斜面上にある。遺物は三十片あまり表面採集しているに過ぎないが、大半は8~9世紀の須恵器供膳具・貯蔵具で、その内に鉄鉢形土器、あるいは鉢類が数個体含まれる点に注意される。

開谷・寺両集落の間の山は、標高264mの山頂を中心に通称「寺山」と呼ばれ、奈良期に越前を舞台に白山や越知山山中で山林修行を行ったとされる泰澄⁽⁵⁾の開基になる寺院が11か寺あったと伝える⁽⁶⁾。山中には「本山」「京塚」、山麓部にも「長慶寺」「観音堂」「卵塔」「浄楽」などといった字名が残る。先の遺物から、この山中で仏教的儀式が8世紀に遡って行われていたのは確実なようである。

(3) 明寺山遺跡

遺跡は、丹生郡清水町大森に所在し、標高65mの丘陵の西側斜面に、4か所の平坦面が造成されていた。最も大きい平坦面を作る1号遺構は、幅約10m、奥行き約2mの規模で、これらの平坦面に8世紀から10世紀前半におよぶ須恵器供膳具・貯蔵具が置かれ、火が焚かれた形跡があった⁽⁷⁾。遺物の中には、「寺」「真成」などの墨書土器が含まれ、報文では後者を僧侶の名と考え、さらに「明寺山」や山麓の「鐘嶋」の字名も合わせて、寺院に関連する遺跡である可能性を指摘している。

(4) 文殊山山頂遺跡

文殊山は、福井市の南端付近に位置し、ここで北の福井平野と南の武鯖盆地に平野を大きく分けている。遺跡は標高365mの山頂の北側緩斜面にあり、かつて「寺」の墨書をもつ須恵器有台坏が採集された⁽⁸⁾。遺物は実見していないが、8～9世紀のものであろう。文殊山はやはり泰澄の伝承をもち、山麓の二上、帆谷、大村、大正寺、南井の各集落の寺社に11～13世紀の仏像が祀られ⁽⁹⁾、南井では12～14世紀の中世墓地が知られている⁽¹⁰⁾。平安期の状況は不明であるが、先の墨書土器は、文殊山周辺の仏教信仰が律令期まで遡ることを示唆しよう。

3. 予 察

前章で述べた4遺跡の様態は決して一様ではないが、いずれも8世紀に成立し、何らかの仏教的要素をもった山中立地の遺跡である。石川県でも、三小牛ハバ遺跡⁽¹¹⁾や浄水寺遺跡⁽¹²⁾などの掘立柱建物から構成される山中立地の寺院跡が調査され、これらもやはり8世紀に成立している。今後もこの種の遺跡が北陸各地で確認されることは十分予想されるが、事例の少ない现阶段では、これらを類型化してその構造や性格等について議論を進めることは困難である。以下では、共通項としての山中立地であることに焦点を絞り、考えてみたい。

畿内をはじめとする他地域では、山中立地の古代寺院であっても、瓦葺の堂舎を構える事例がむしろ一般的である。したがって瓦葺か否かという点はそれほど本質的な問題と思われぬ。それは、多雪地帯という屋根重量の問題と、寒冷地という瓦の凍害の問題による、気候風土への適不適の結果であろう。

畿内の山中寺院に7世紀代に成立する事例はあるにせよ⁽¹³⁾、北陸の諸例が8世紀代に成立することから推して、これらは、序に述べた7世紀後半代に成立した瓦葺の諸寺院とは性格がやや異なると考えられる。達日出典は、大和吉野山について、「苦修練業する優婆塞・沙弥・禪師などが、仏教的呪法を身につけ、庶民の要請に応じては加持祈禱・ト占などを行っていた」とし、さらに「山寺に拠点を置く官僧」なども含めた「各種入り混じっての修行の場」であるとした⁽¹⁴⁾。また藪田香融は、吉野比蘇山寺を拠点とした、密教修法たる求聞持法を修する一派「自然智宗」について論じ、官僧の本拠「官寺」と修行場

としての「山房」の関係を指摘した⁽¹⁵⁾。

このような山林修行のイメージが、如上の諸遺跡にどこまであてはまるか今後検証すべき点は多いが、8世紀代のとくに後半以降、畿内の状況と連動して、山中に多くの山林修行の場が設けられたことは確実視してよいものと思われる。越前においては、後に「越前五山」と称される白山、越知山、文殊山、吉野岳、日野山が山岳信仰の舞台として喧伝されるが、これらの前提として、里に近い山々で仏教活動が開始された画期が奈良時代に求められる。白山に連なる加越山地の中でも、9世紀後葉には信仰活動が行われた形跡がいくつかある⁽¹⁶⁾。これらの古代山岳信仰の場の中で中核的なものは、12世紀前後になり経塚や墓地を伴う中世的な信仰の場へと展開を見せ、さらに越知山など、白山を中心に「白山信仰」の場としてネットワーク化されたものもあったと予想しているが、具体的な考察は後考を期したい。

(久保 智康)

- (1) 水野和雄・久保智康「資料編・福井県」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』北陸古瓦研究会 桂書房 1987
- (2) ただし、越前地方において造寺を主導した各地域の有力氏族たちが具体的にどのような意図をもって寺院を造営維持したかは、中央史料とは一歩距離をおいて考えていかねばならないと思われる。
- (3) 例えば、須田勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」(『古代探叢II』早稲田大学考古学会 1985)などがある。
- (4) 建物の最終確定は、今後の調査結果をまちたい。
- (5) 『泰澄和尚伝』(金沢文庫本)。これは正中2年(1325)書写の奥書を有し、成立については、13世紀前半とする浅香年木「泰澄和尚伝」試考(『古代文化』36-5 1984)や、12世紀とする長坂一郎「泰澄和尚伝」と越知山(『福井県立博物館紀要』1 1985)などの論考がある。
- (6) 「寺の集落誌」『宮崎村史』宮崎村 1987
- (7) 仁科章「明寺山遺跡調査概要」清水町教育委員会 1983
- (8) 「県内墨書土器一覧表」『福井県史 資料編1 古代』福井県 1987。遺物については、中司照氏のご教示による。
- (9) 長坂一郎他「山々への祈り—越前五山の神と仏—」福井県立博物館第7回特別展図録 1987
- (10) 田中照久「越前国鯖江市南井町・南屋敷中世墓址出土の中世陶器」『福井考古学会会誌』創刊号 福井考古学会 1983
- (11) 出越茂和・南久和「金沢市三小牛ハバ遺跡」金沢市教育委員会 1988
- (12) 垣内光次郎「浄水寺遺跡の概要」『浄水寺墨書資料集』石川県立埋蔵文化財センター 1989
- (13) 代表的な例として、滋賀県崇福寺や奈良県南法華寺などが挙げられる。

- (14) 遠日出典「奈良朝山岳寺院の実相」『論集日本仏教史 2 奈良時代』 雄山閣 1986
- (15) 藺田香融「古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめぐる—」『南都仏教』 4 1957
- (16) 白山の別山山頂で、K-90号窯式の灰釉小瓶が(二谷正信・豊島稜威夫「別山々頂出土の瓶について」『福井考古学

会会報』5号 1984)、丸岡町豊原寺跡でも、同時期の灰釉浄瓶を含む土器群が出土し(岩田隆・金元賢治『豊原寺跡III (伝)講堂跡第一次発掘調査概報』丸岡町教育委員会 1982)、さらに永平寺町浄法寺山山頂でも該期の土器とともに八花鏡片が採集されている(久保智康『古鏡の美—出土鏡を中心に—』福井県立博物館第5回特別展図録 1986)。

資料紹介

うぶめし まくらめし オゴケと産飯・枕飯



オゴケ各種 左から、勝山市北谷町小原、武生市高木町、小浜市新保

麻の皮から取り出した繊維(苧)を細く裂き、糸にするために長くつないでいくことを苧績みといました。こうして績んだ苧をためていくのに使った容器がオゴケ(苧桶)です。オンケ、オボケというところもありました。この苧績みの仕事を記憶されている方ももう少なくなっていました。博物館ではこれまでに10点ほどのオゴケを収集することができました。曲物、タガのかかった桶、竹籠に紙を貼って作ったものなどがあり、直径は24~33cm、深さは15~25cmぐらいの大きさです。使っていた当時のままに、績んだ苧や、苧をしごくのに使ったコキバシが中に残されていたものもあります。また、嘉永2年(1849)の墨書が残されたものがあり、これなどは母から娘へ、あるいは姑から嫁へと代々譲り渡されてきたものなのでしょう。

オゴケはあくまでも苧績みのための道具なのですが、ここではちょっと変わったことに使われた例があることをご紹介します。

三方郡三方町世久見では、子どもが生まれて7日目をコヤアガリといい、親戚や近所の女の人たちを招いて出産のお祝いがありました。これは台所で行

われましたが、そのときに台所の神棚の下に、写真のようなコヤアガリのウブメシ(産飯)という、ウブノカミサン(お産の神様)へのお供え物をしました。これは昭和13年に男子を出産した大正4年生れの婦人の話をもとに復元したのですが、小豆飯、ナマス、煮物、昆布巻といった料理と、ウブノカミ



コヤアガリのウブメシ 三方町世久見

サンの象徴として、浜から拾ってきた小石2つが、伏せたオゴケの上に並べられています。このようにしてオゴケを使うのは、この産飯のときだけで、また昔からそうしてきたということですから、身近にあった適当な物を利用したということ以上の意味があったことと思われまふ。

また、遠敷郡名田庄村小倉でも産飯の台にオゴケが使われました。小倉では子どもが生まれるとすぐに御飯を炊いて、産室内の恵方に向けて供えました。小倉では直接オゴケの上に産飯をのせるのではなく、朱塗りのお膳を使いましたが、そのお膳はやはりオゴケの上に置かれたということです。^(注)

ところが小倉に近い同じ名田庄村の納田終では、オゴケを使ったのは産飯ではなく、死者の枕飯だという話をきくことができました。産飯と枕飯という

産育儀礼と葬送儀礼の対照的な場面に、いずれもオゴケが登場するというのは興味深いことです。

今のところ以上のようなわずかな例だけですが、ほかでも産飯や枕飯にオゴケを使うことがなかったか、調査の範囲を広げて確認する必要があります。

箕や臼、一升椀などの民具も、本来の用途のほか、儀礼や信仰にかかわる場面で使用されることがあることはよく知られています。それらの物に人々がどのような意味づけをしていたのかを探ることは、民具を研究することの一つの面白さでもあります。

(田中)

(注)小倉の産飯については、天野武「若狭のウバガミ(産神)ー福井県遠敷郡名田庄村小倉の場合ー」(『若狭の産小屋習俗』、文化庁文化財保護部、1989、所収)に詳しく報告されている。

ビデオライブラリーから

祝部の村

「祝部」は「ほうり」と読みます。祝部は神に仕える人のことですが、美浜町日向では長老が交替で就任する一年神主の意味でつかわれています。日向の稲荷神社には専門の神職がいなくて、祝部が神事をおこない、神社の世話をしているのです。

若狭地方に中世からの伝統をもつ祭りや芸能がたくさん伝えられているのは、そのころからの氏子組織「宮座」の伝統を持ち続けているからともいえるでしょう。祝部の制度を守り続けたのも同じ伝統によるものです。

この作品ではたくさんある神社の祭りの中から、秋から春の祝部の交替までのものを収録しています。その中の一つ、正月をみてみましょう。元旦には全戸の主人が長床に集まり、新年の豊漁を祈る儀式がおこなわれます。まな板の魚を切る「板の魚の儀」、御神酒を杯につぐ時の所作、祝部が述べる口上、それらはすべて古くから伝えられてきたものを守っています。3日の朝には弓矢を射って、悪霊を追うビシャがあります。この時の祝部の口上は、一言もかえてはならないし、まちがってもならないとされています。(坂本)

東尋坊の自然

福井県民に親しまれてきた「雄島」は、三国町の海岸部に位置し、観光地東尋坊と一体となった風光明媚な場所として知られています。この一帯は、今から約1000万年前に堆積した地層で、堆積岩や火山岩が広がっています。

堆積岩は、礫岩や砂岩が繰り返し積み重なり、見た目にもきれいな「縞状」の景観を作りだしています。また、火山岩も何回かの噴火によってくりあげられたもので、力強い男性的な景観を示してくれます。さらに火山岩には、形状や大きさの異なる「節理」が見られ、自然の不思議さをも感じさせます。節理には、大きく分けて「柱状節理」と「板状節理」とがあります。これらはマグマが地表に噴火するときの場所や噴火様式の違いが節理の形態に影響を与えているのです。雄島には、この2種類の節理が典型的に観察することができます。一方、越前松島付近では明らかに海底(水中)噴火でできた節理も観察することができるのです。

この付近の植物も特有な種類が保存され、過去の温暖な気候だった時期のレリックとして学術的に貴重なものです。この番組では、これら自然が創った遺産を紹介しています。(東)

みなさんの身近にこんな資料はありませんか？

みなさんの身近にある資料が、福井県の歴史や民俗を知る大きな手がかりとなります。博物館では、このような資料の情報をおまちしています。

絵はがき・スナップ写真など

【明治・大正・昭和期にかけての写真資料を探しています。】

明治後期に発行されはじめる「写真絵はがき」、そしてまた、大正・昭和に普及した記念写真やスナップ写真など。写真は、地域の景観や人びとの暮らしぶりなど、文字では残されにくい歴史の一面を伝えてくれます。

なにげない一枚の写真が、当時の政治や社会の状況を如実に物語る貴重な歴史資料になることがあります。



①敦賀金ヶ崎神社（彩色写真絵はがき）
[明治末～大正期]



③織物工場の慰安会（写真） [大正末～昭和初期]



②国勢調査記念（絵はがき） [昭和5年(1930)]



④小学進級記念（写真） [大正3年(1914)]

〈③④：福井市松本3 高木アサ氏提供〉

ふくいミュージアム
No.19
1991.3.20発行

編集発行 福井県立博物館
福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
印刷 出口印刷株式会社

